

# とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号 66-0791  
施設名 キッズタウンにしおおい  
施設所在地 東京都品川区西大井2-5-2 1  
法人名 社会福祉法人こうほうえん

## 1. 活動のテーマ

### 自然【栽培活動を通して学ぶこと】

#### <テーマの設定理由>

進級当初、戸外での自然への探索活動が意欲的で真剣な表情で遊び込む姿が印象的だったのに対し、食事の時間になると疲れた顔で「もういらない」「食べない」などの言葉や、その言葉すらもなく食事を終えてしまう子どもの姿が多く見られた。そこで、子どもたちの探求心や自然が大好きな気持ちをさらに引き出して“食育”にも繋げられないかと、栽培活動を始めた。

## 2. 活動スケジュール

- 4月 ピーマンについて知る「ピーマンの絵本」でピーマンとはどんなものか興味を持つ。
- 5月 栽培用の土を準備、プランターに土を入れる活動  
苗植え、水やり、観察。水やりはグループごとの当番として一人ひとりが意欲的に行った。  
園庭に出て遊ぶ度に、ピーマンの様子を毎日観察。  
支柱を立てる体験。肥料揚げの体験
- 6月 初めての収穫体験 種取り体験、目の前で調理してもらい食べる。  
食育活動の一環でままごと遊びを充実させる。
- 7月 さらに収穫、みじん切りにしてみる体験、ハンバーグやふりかけにして食べる。
- 8月 葉っぱの剪定を保育者とする。ピーマンが完熟していく様子の観察  
完熟ピーマンの試食
- 9月 引き続き収穫できる。食べられなさそうなものは野菜スタンプにして敬老の日のプレゼント
- 10月 枯れた苗木の撤去、片付けも一緒に行う  
大根の種まき、栽培開始
- 11月 大根収穫、調理してもらい食べる

## 2. 探究活動の実践

#### <準備したもの>

ピーマンの苗、土、肥料、ままごと、パーテーション、図鑑、絵本、食育紙芝居

#### <活動の内容>

## ○ピーマンの栽培

ピーマンの栽培では、まずピーマンに興味を持てるように、ピーマンがとうがらしの仲間であることや完熟すると赤くなり、甘味が増えることなどの情報を、事前に絵本で分かりやすく知らせた。育てるのに必要なもの、子どもたちがやることも絵本を見ながら一緒に見つけ出した。

また、当番をグループ活動にして、毎日水やりすることを楽しみに出来るようにした。

葉っぱが大きく伸びていく様子や、花が咲いたこと、実が次々と成ることを喜び生長を楽しみにしていた。完熟していくまでの様子もじっくり観察していき、黄色→オレンジ→赤と濃くなっていく様子に気が付き楽しんでいった。また「甘くなったかな」と食べてみることも楽しみしていた。

## ○ピーマンの調理

自分達で収穫したピーマンを、種取り、みじん切りなどして目の前で調理してもらった。

ピーマンを調理する過程を見て楽しみ、香りで食欲を誘い、実際に給食で提供した。

まずはそのまま炒めて食べる、次はみじん切りにしてハンバーグに混ぜこむ、次にピーマンふりかけ、最後には赤くなったピーマンを炒めて試食することを行った。

## ○大根栽培

子どもたちが栽培をととても楽しんでいったことから、栽培キットを使った大根栽培を始める。前回とは違い種から行った。発芽に喜び、大きくなっていく大根の葉に水を沢山あげたが根っこが育たなかった。

抜いたときには赤ちゃんのような大根が完成し、子どもたちは栽培の難しさや、食べ物のありがたみも感じているようだった。葉っぱの部分は味噌汁に入れて食べた。

## <活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり>

活動の中で、当番であることをとても楽しみ、子どもたちから「今日は〇〇グループさん」「先生、きょうまだみずやりしてないよ」など意欲的に行う姿が見られた。

肥料もなぜあげるのか、子どもたちに分かりやすく伝えると「今日は魔法のお水にした方がいいんじゃない？」(ハイポネックスを混ぜた水の事)と子ども発信でやろうとしてくれた。育っていく中での変化にもよく気が付き、自由に園庭で遊ぶ中でも気が付くとピーマンの側に行き、じっくり観察する様子が見られた。

苦手な食べ物が多かった子どもたちも「(自分達で)作ったものだから食べてみようかな」「どんな味がするんだろう」「食べて見たらおいしかった」と美味しい=楽しい経験を積み重ねることができた。

また、調理を経験、見学する過程で特別な活動として好奇心を持ち、参加していた。

栽培や調理、食べてみようかと挑戦する中で、子どもたちは保育者に「どうしたらいいの?」「これはなんでこうなるの?」等と疑問に思ったことや困ったことをどんどん保育者に聞いて学ぼうとする姿もあった。

子ども同士でも、ピーマンや大根の成長の変化や水やりで「こっちはもうあげたよ!」「〇〇ちゃんこっちあげて」等やり取りしながら話していた。

食事に対する苦手意識や消極的な姿勢が目立っていたことを機に、ままごと遊びを充実させ、遊びの中でも食に対する興味を持てるような取り組みを行った。玩具を充実させることで、子ども達が表現する姿も増え、栽培活動を通して行った目の前での調理を再現して遊ぶ子どもの姿も見られるようになった。

食べられないピーマンは敬老の日の製作に使用した。プレゼントにすることで子どもたちが祖父母に「大地組さんが作ったピーマンでスタンプしたんだよ」等と会話が生まれたり、経験したことを話す機会も生まれた。また、食事に対して意欲的な姿が増え、残数がかなり減った。

## <振り返りによって得た先生の気づき>

栽培活動を通して、様々な気づきや学びが得られた。

食べ物の大切さや、育てる事の楽しさ、難しさを経験し「食べてみよう」と思える心を育てる事ができたのではないだろうか。栽培活動は決して簡単な物ではなく、保育者も知識がいる。子どもたちと絵本や図鑑、

実体験を通して共に学び、食に関心を持つきっかけになったと思う。また、子どもたちの意欲がある活動だったからこそ、当番活動も積極的だった。

ままごと遊びをする際には、パーテーションを使用して他の遊びと環境を区切ることで、子ども達が遊びの切り替えができ、じっくりと遊びこんでいるように感じた。

子ども達を取り巻く環境から、アプローチしていくことの有効性も確かめられたのではないだろうか。

### 〈活動写真〉

